

特集

卵巣癌における HRD と PARP 阻害薬の効果

企画者のことば

松村謙臣*

近年、卵巣癌(腹膜癌と卵管癌を含む)に対して、PARP 阻害薬であるオラパリブおよびニラパリブが保険承認されました。PARP 阻害薬では、BRCA1/2 遺伝子変異や相同組換え修復欠損(homologous recombination deficiency: HRD)がバイオマーカーになります。そこで臨床上、PARP 阻害薬をどのような患者に用いるべきかを考えるうえで、DNA 修復機構や HRD に関する知識が必須となります。また、保険承認された2剤の特徴を理解することも、それらを使い分けるうえで重要です。そして、既存の抗がん剤の有効性や抵抗性は DNA 修復機構と深くかかわっています。しかし DNA 修復機構は複雑で、専攻医や一般の産婦人科医のみならず婦人科腫瘍を専門とする医師からも、PARP

阻害薬の作用機序や HRD のことが理解できないためわかりやすく解説した教材がほしいという声がよく聞かれます。私自身、DNA 修復機構について勉強しようとして、何度もくじけそうになりました。

そこで今回は、DNA 修復機構について研究し続けてこられた一流の基礎研究の先生方や、婦人科腫瘍分野におけるエキスパートの先生方に執筆をお願いしました。本特集は、HRD の基本原理から卵巣癌の臨床に直結する項目までカバーした、唯一無二の内容となっています。本特集が、産婦人科医である読者の皆さんにとって、HRD と PARP 阻害薬に関する理解を深め、卵巣癌の患者さんに対するベストプラクティスを行うための一助になれば幸甚です。

*Noriomi Matsumura 近畿大学医学部産科婦人科学教室